

労働力不足が招来させた正社員化の流れ

千葉の県人 鎌田 留吉

ICASの理事長を勤められている、竹内さんのホームページを読むことを私は楽しみにしている。その幅広い教養と、経済学に対する深い理解に裏打ちされた、客観性のある卓論にいつも勉強させてもらっている。ICASのホームページの一番下の辺りに、「ICAS講師陣」というコーナーがあり、その竹内宏氏のところをクリックすると「竹内宏の経済情報」というホームページに到る。

今日はその中にある「静岡新聞論壇」の2014年6月19日付けの記事「長期雇用の復活のメリット」と題する文章をテーマに取り上げたい。

失われた20数年にリーマン・ショックが加わり、さらに大震災にさえ襲われて、日本の企業群は正社員の採用を極端に抑えてきた。私はかねてから、正社員が減り派遣社員がはびこる現状を、辛い思いで見ている。曲学阿世の徒である竹中平蔵氏は自ら会長を勤めるパソナグループの意を体してか、正社員をなくせと叫び、同一労働・同一賃金と呼ばわって、経営者の賃金抑制行動に与する言動を繰り返してきた。

目を輝かせた若者が、大学を卒業するに際し、「さあ、この仕事を一生の仕事とし、自己を実現させていくぞ」と願うのが普通であろう。誰が人生の門出に際し、「派遣社員で頑張るぞ」などと言うか。竹内さんは指摘する。「非正規社員やパートタイマーは契約期間が限られており、単純作業をマニュアル通りに繰り返すだけなので、作業への改良意欲が湧かない上、その技術を将来如何に生かすか、展望が開けない。」「彼らは、最も頭脳が柔軟で、複雑な技能を習得したり、知識を広く吸収できる時期を無駄に過ごしている。本人にとっても、日本経済にとっても、取り返しがつかない損失である。」

私も全くそのとおりであると思う。非正規社員の蔓延は、目先の一時的コスト(?)削減のため、企業のsustainableな発展のために最も肝要な、人を育てるということを犠牲にし、多くの若者の夢を喪失させた。正に竹内宏氏の指摘されるとおり、「日本経済の国際競争力が著しく低下し、また多くの人の才能と幸福を台無しにしたといえよう。」

しかし、幸いにして「労働力不足」が日本をおそってきた。1990年台半ばから生産年齢人口の減少が進んでいたが、今や「団塊の世代」が完全に65歳以上となった。

大震災以後、建設労働者の不足が言われ続けてきたが、今や「ブラック企業」までが白旗を上げ始めた。ユニクロがパート・アルバイト合計3万人の半分以上に当たる1万6000人を正社員化すると発表した。ゼンショーは店舗の人員不足のため、一部閉鎖に追い込まれた。雇用者と被雇用者の力関係が転換しつつある。

さあ、目を輝かせた若者よ！新しい正社員の時代の到来だ！そこには「働きがいと生活の安定感」がある。一所懸命に働いて自分を向上させる機会が与えられる。

竹内氏はこう締めくくる。「非正規社員こそ「会社社会」から離れた新しい生き方だと評価する人さえいた。サラリーマンが働きつつ、技能向上を喜んでいることを全く知らないのである。」

2015年1月19日 記